ふくいミュージアム

1989.3.25
No.15

福井県立博物館

南条郡湯尾村絵図（明治四年）

福井県立博物館第10回特別展

描かれた越前若狭

～江戸時代の絵図～

4月28日(金)～6月4日(日)

古来より地図・絵図は地域把握の手段として地誌とともに重要視されてきました。江戸時代には国絵図・町絵図・村絵図をはじめとして、さまざまな絵図がそれぞれの目的のもとで作成されました。これらの絵図は、文献だけではうかがうことのできない地域のようすを教えてくれます。今回の特別展では、次のような構成で展示し、絵図をとうして江戸時代の越前若狭をみてみたいと思います。

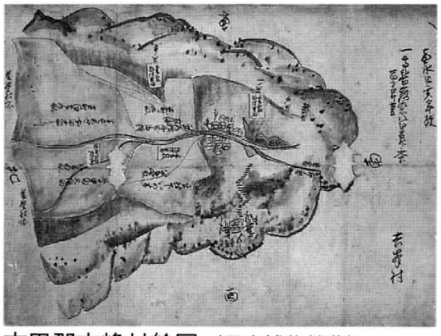
1、ふたつの国（越前国絵図と若狭国絵図）

2、城下町と湊町

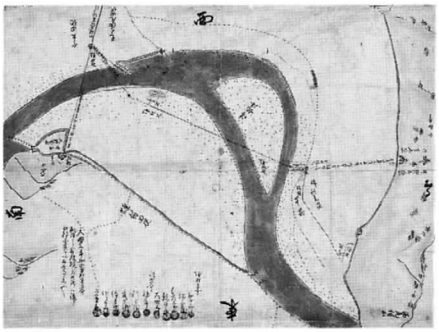
3、村むらと生活　①村のすがた　②産業と交通
　　③境をめぐる争い
　　④水とのたたかい

4、寺と門前

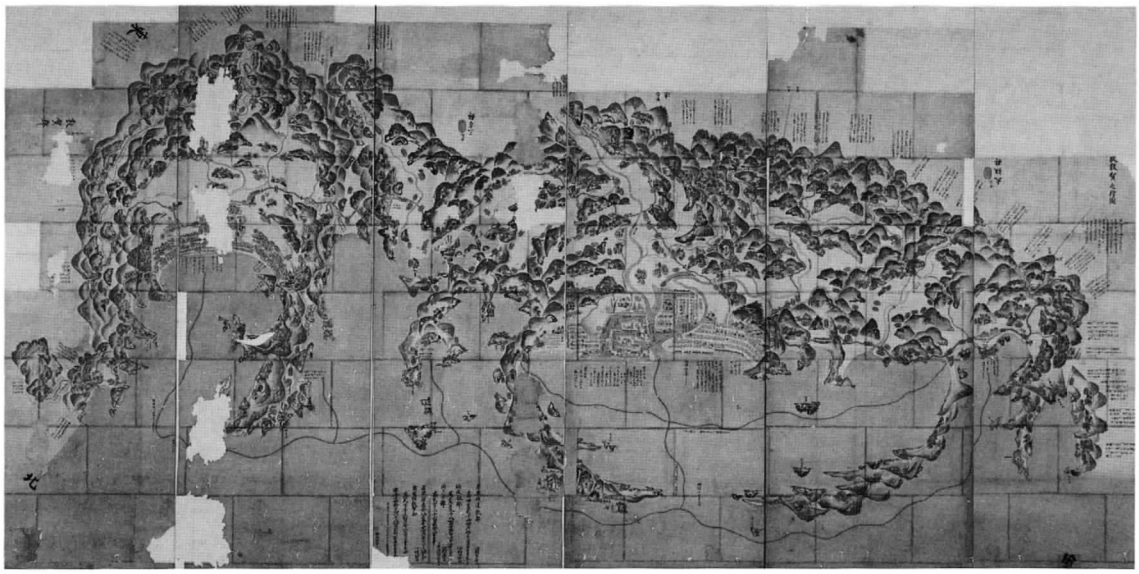
特に「村むらの生活」では、里方・山方・浦方の村のようすを描いた絵図、人びとが生活をかけた山・海・川の境をめぐる争いからつくられた絵図、生活するうえで欠くことのできない用水にかかわる絵図等によって、当時の村むらと村びとの生活を読みとっていただければ幸いです。



吉田郡吉峰村絵図（県立博物館蔵）



南条郡湯尾村燧村河原争論絵図
（県立博物館蔵）



正保　若狭国絵図（酒井家文庫蔵）

共催展　開館５周年記念

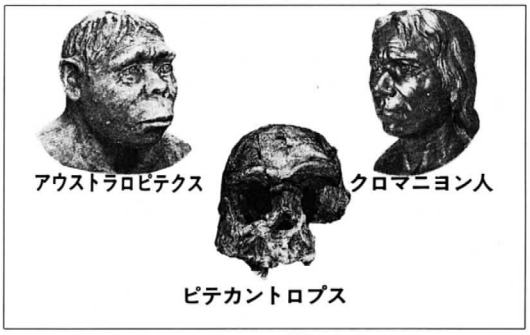
人類誕生400万年展　～人はサルから生まれた～

主　催：福井県立博物館・中日新聞社
後　援：外務省・文部省等
会　期：平成元年６月23日(金)～７月30日(日)

数百万年の昔、私たちの祖先はサルから人へと進化し、さまざまな物質文化や精神分化を生み出し、自然界から脱却して人類だけに見られるゆたかな生活環境を築き上げてきました。それは私たちに豊で便利で快適な生活を約束しましたが、現在いろいろな形として全人類的、地球的危機を増大させてきているとも言えます。

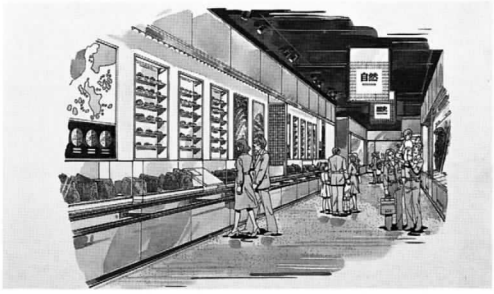
過去を無視することは、現在をないがしろにし、未来に目をつぶることでもあります。したがって未来への指針を得るためにも、人類誕生から今日までの進化をたどり直し、「人間とは何か」を問いつつ人類の未来を探ってみようというのがこの特別展のねらいです。

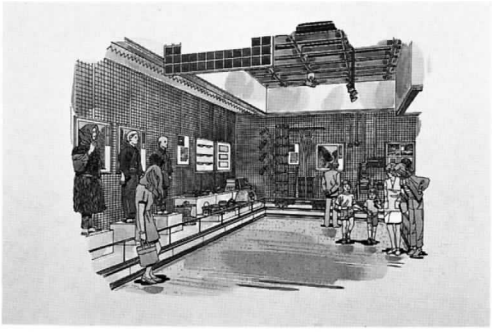
展示される標本は、世界各地から発掘された人類標本ばかりです。ケニアピテクス・プロコンスル・ラマピテクス・オーストラロピテクス・北京原人・クロマニヨン人などで、ラマピテクス・シバピテクス・ギガントピテクスなど今回初めて日本で公開される実物の標本も含まれています。また、映像やロボットなども取り入れられた、興味ある展示となるでしょう。



（「日本人の起源展」より）

常設展示がリフレッシュ！　～開館５周年の常設展示更新～





県立博物館は昭和59年春に開館し、この３月で満５年を経過することになりました。そこで当館では開館５周年を記念し、常設展示の一部展示替えを行いました。この５年の間に当館が収集した新しい資料も増え、これまでになかった資料も多く集まりました。これらの資料を常設展示の中で公開することにしました。また、常設展示に対して多くの方々から寄せられましたご意見なども参考にして、大巾な改善をしております。

これまで当館には、県内、県外から約25万人の来館者がありましたが、これらの方々はもとより、初めての方も是非ご覧いただきたいと思います。

１）自然：恐竜化石を中心に化石の展示を充実しました。

２）歴史：展示の項目を全般的に見直し、特に明治以降の「近代」のコーナーを充実し、「福井県の誕生」「近代化する福井」「戦争と県民」の項目を新たに設けました。

３）民俗：「食」の項目を新設し、従来の解説を充実しました。

研究ノート

解体新書と小田野直武

「解体新書」を翻訳した杉田玄白はあまりにも有名であるが、同書の挿絵を描いた秋田藩の画家小田野直武も忘れてはならない人物である。

直武は江戸時代における最初の洋風画派である秋田蘭画の中心人物として活躍した画家で、寛延２年(1749)に秋田角館で生まれた。幼少の頃から画才を示し、狩野派の筆法に則した作品や、肉筆浮世絵風のものも描いていた。

安永２年(1773)に平賀源内が、秋田藩の阿仁銅山整備充実のため指導に向かう途中、角館に立ち寄り直武の描いた日本画を見て感心し、西洋の写実的な画法を教えたといわれる。

直武はその年の12月には源内を追って江戸へ上ってきた。

源内はもともと本草学（薬用になる植物や動物、鉱物などを研究する学問）を勉強していたが、博物学、産業技術、洋風画、更には狂歌、戯作などにまで幅広い才能を発揮したマルチ人間であった。

その頃の江戸における文化人、知識人の交遊関係は相互に極めて幅広く、蘭学という学問を中心に分野を越えて広がっていた。その柱となったのが源内である。直武は源内の紹介によって杉田玄白とも知りあったと思われる。

玄白も解体新書を翻訳した医学者というだけではなく、これらの文化人グループと交流しつつ、新しい洋風文化の導入に貢献した人物としても評価すべきであろう。

玄白はこれよりさき明和８年(1771)にターヘル・アナトミアを見て挿絵だけでも従来の伝統的な和漢の医学書とは異なったその表現力に目をみはった。

また実際に小塚原での刑死体の腑分けに立ち会いその正確さを認識したことから、解体新書の挿絵画家を決定するに際して、当時まだ江戸へ出てきたばかりの直武を起用した。これは、画界における師弟関係に縛られていない直武の豊かな才能、旺盛な好奇心を見抜いていたと思われる。

秋田藩佐竹侯の江戸屋敷と、玄白のいた酒井邸と

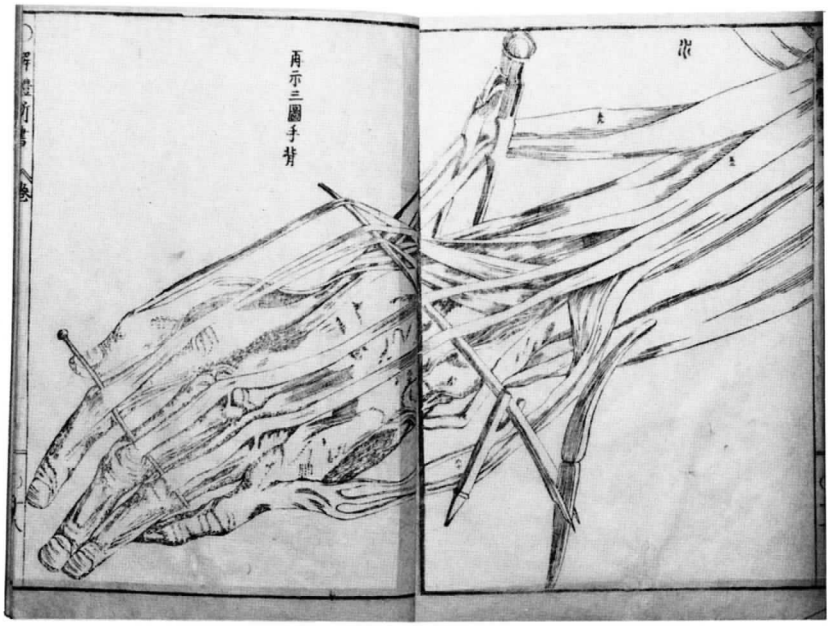
〔１〕小田野直武筆「蓮図」神戸市立博物館蔵

は同じ浜町で至近距離にあったのも幸いしたようだ。

直武が解体新書の序図の最後に「我友人杉田玄白…」と記しているように単なる仕事仲間以上の親密な人としての交わりがあったに違いない。

直武が平賀源内の後を追って江戸へ来たのは安永２年で、挿絵を描いたのは翌年なので、その間洋風画の学習に取り組んだ期間は極めて短い。

直武は源内から与えられた各種の動植物や人体の解剖図などを手本にして勉強したと思われる。また時代の要請として解剖書のみならず、動物学、植物学などを含めた自然科学が導入されたので、これらの対象物を正確に描写する技術が必要であった。人体の解剖図にしても平面ではないので、立体感、遠近感が表されていなければならない。



〔２〕小田野直武筆　解体新書（序図）より

写真〔２〕の手の筋肉解剖図などには直武の学習の成果が現れている。

解体新書は医学書であり、その挿絵に必要なのは精緻で正確な表現である。従って画家としてその創作意欲を満たす場ではなく、原図の銅版画を見て模写するだけの画家にとっては面白味のない作業である。

このようにして挿絵を描くことになった直武は、面相筆で丹念に写しとり、脇役としての勤めを果したが、彼にとってこの仕事は大きな意味を持っていた。解体新書の木版のなかで使われた細かい線を用いる技法と細密描写は、彼の肉筆画に生かされ、またそこで学んだ博物学の知識は花鳥画に集約されている。

代表的な例として「不忍池図」（秋田県立博物館蔵）がある。これは不忍池を背景に手前に芍薬の花の鉢を置いた図である。花は鮮やかな色彩で葉の部分には陰影をつけている。極めて写実的に描写されながらも、我が国の従来の花鳥画にみられる情感が無く、現実味の乏しい一種独特のシュール的な画面を構成している。

また写真〔１〕の「蓮図」（神戸市立博物館蔵）では蓮の花を写実的に大きく描き、同じ様に濃淡で陰影をつけている。この図では背景はあまり重視してないようであるが、細い銅版画風の線で表されている。

また動物を描いたものとして「鷹図」や「鷺図」などがある。いずれもそのタイトルとなっている動物をクローズ・アップして精密に描き、背景となる風景は小さく対照し画面に奥行きを与えている。

これら作品には動植物の図譜類を参照したと思われるような観察の細かさがあらわれている。

直武をはじめとする秋田蘭画は、最初の洋風画として高く評価されるが、素材として新しいものを用いたわけではなく、日本古来の絹本に彩色しており、鎖国時代の枠の中で新しい表現方法を模索して辿りついた一つの成果と考えられる。

直武とそのスポンサーともいえる秋田藩主佐竹曙山によって芽を出した秋田蘭画も、直武が31才という若さで死去し、指導者を失って途絶えてしまった。しかし、その後の司馬江漢らの本格的西洋版画の導入へのきっかけとなったのである。（貴志真人）

注　写真〔１〕は神戸市立博物館提供

資料紹介

「樹皮の民具」

山村の古い民具の中には木の皮で作ったものがある。こうした物は町や平地の農村ではなかなか見ることができない。63年度に収集した資料の中から、樹皮で作られた民具を概観してみたい。

最も簡単なものに大野市上打波で収集したオーレンのひげ根を焼く台がある。大きさは幅70cm、長さ123cm。サワグルミの皮を使い、両端は少し内側にしぼるようにして上に折り曲げ、前後に角材をあてて釘でとめている。1か所破れたところがあり、細い縄で口をとじている。皮は完全な平らではなく、かなり波打っている。

写真はけやき皮で作ったイズメ。長径が65cm、短径58cmとややゆがんだ円形。深さ37cm。大野市上打波で収集された。皮を自然のまま筒状にしたものではなく、円周の長さは皮の縦方向で確保している。さらに皮をひっくり返していて、外皮はイズメの内側に向けられている。鬼皮はていねいに削り落としてあり、多少のあとが見られる程度である。とじしろは約30cmとってあり、端近くを麻のような繊維のひもでかがる。上端と下端は外側にけやきの皮で縁を回し、糸でとめている。上端は縁が2重ねになっており、しかも中の子供が触っても木の堅さを感じないようにわらで編んだひもを巻いている。

イズメは乳幼児期の子供を入れておくもので、わらや竹かごで作るのが一般的である。樹皮で作ったものは石川県の山間地でも採集されているが、数がごく少ない。上打波では稲作がほとんど行われず、稲わらも里から購入するくらいであった。樹皮のイズメは、わらがないことも影響しているだろう。

同様のものに小形の桶状の容器がある。底の直径28.5cm、高さ31.5cm。ただし上端は大きく歪んで長径31cm、短径25.4cmである。全体に煤が強くかかっているが、材料はけやきの皮のようである。この資料は木の縦方向を円周にしているが、内外を返してはいない。とじしろは約12cmの重なりがあり、6cmの間隔で内外の皮の端を太い糸でかがっている。底板は表面の加工もへぎ割っただけで、皮の筒に落とし込み、和釘でとめたようである。すきまがあちこちにあって、綿くずのようなものがつまっている。

液体を入れることはできず、オゴケのように使ったのであろう。

これらによく似た技法の木製品に曲物がある。曲物は檜や杉の木を簿く削り、湯にとおした後、癖をつけて丸くする。接合部はさくらの皮でとじる。その上で薄く漆を塗ることが多い。この2点も木の皮を剥いだままでとじあわせたのではない。縦横をかえ、裏返しにする以上、筒形にするために、湯をとおしたり、癖をつけるなどの必要があっただろう。基本的な技術は曲物と同じである。ただ細工の悪さから見て、販売のための物でないことは確かであろう。

曲物では木を薄く均一に削らなければ、正確な形の製品はできない。また柾目を基本にするため材料の無駄も多い。樹皮なら自然状態でほぼ均一な厚さであるし、長さ（製品では円周）も、幅（高さ）もかなり大きなものがとれる。

現在残っている樹皮の民具の多くはひどく煤をかぶっている。これは日常的な使用がやんでから相当の時間が経過していることを物語っている。山間地では自製の生活用具が多く使われた。樹皮の民具は自給的な過去の生活を物語るものであり、また曲物の発生段階を伝えるものかとも思われる。（坂本）

なお、ここで紹介したイズメ、桶状の容器は石畝弘之氏の収集されたものである。

郷土の人物シリーズ

杉田定一（その①）（1851～1929）

杉田定一は、雅号（がごう）を鶉山（じゅんざん）といい、越前の自由民権運動家としてよく知られています。

定一は、嘉永４(1851)年、旧坂井郡波寄村（なみよせ）の豪農（ごうのう）杉田家の長男として生まれ、幼名を鶴吉郎といいました。少年期は、教育に熱心であった父仙十郎のすすめで、家を離れ、三国滝谷寺の学僧道雅（どうが）上人や福井の儒学者松井耕雪（こうせつ）、吉田東篁（とうこう）のもとで学びました。また、18歳からは福井藩士の三崎嘯助（しゅうすけ）をたよって、大阪の理学校や東京の三崎塾で理化学も学びました。

そして、いよいよ25歳のとき、政治家を志して再び上京し、仲間とともに「采風（さいふう）新聞」を創設しました。その後も「評論新聞」や「早莽（そうもう）雑誌」などの記者として言論界に身を投じ、薩摩藩や長州藩出身の一部の人たちで動かされた新政府を批判して、投獄されることもありました。明治10(1877)年、旧薩摩藩を中心に、新政府に不満をもった士族が反乱(西南戦争）を起こすと、同志とともに東北地方の挙兵を計画しました。しかし、その夢をはたせず、土佐の板垣退助に会い、今後は武力による反乱より、言論で政治を動かす運動をすすめることを約束しました。

そこで、多くの人びとの意見を政治に反映できるよう、国会の開設を求める自由民権運動に全力をそそぐことになりました。

〔参考：「杉田鶉山翁」昭和３(1928)年〕（笠松）

ビデオライブラリーから

古墳を掘る

このビデオは、昭和58年６月に博物館建設準備室がおこなった、福井市西谷山２号墳の発掘調査の記録を中心にまとめたものです。

西谷山２号墳は、福井市西谷町の、通称八幡山と兎越山の間の尾根上にある、直径20mあまりの円墳です。大正13年、休憩所を作るため墳丘を削ったところ、２個の舟形石棺が出土しました。特にそのうちの２号石棺からは、鏡や玉、鉄器、人骨などが出土しました。これらの大半は、東京国立博物館に寄贈され、石棺だけはまた、埋め戻されたのです。

今回の調査は、このときの記録をもとに、２号墳を改めて調査し、埋葬主体部の状況や、石棺の形状、遺物の有無などを確認する目的でおこなわれたものです。

番組では、掘り始めから、出土品の整理・検討まで、遺跡の発掘の様子を詳しく描いています。なかでも、50年ぶりに石棺の蓋を開けるときの、見学に訪れた人たちの期待に満ちた顔、また、石棺を修復・展示するために山の下へ降ろす作業の様子などは、非常に印象的です。私達現代人が抱く古代へのイメージとは、一体どのようなものなのか、またどうあるべきなのかということを考えていくための足がかりにしていただけたらと思います。（久保）

石田縞の復元

卒業式のシーズン、はなやかな晴着のなかに混じって昔ながらの袴スタイルの女子学生の姿が目をひきます。ところで、明治から大正にかけて、県内の女学校の制服地の多くには、石田縞とよばれた縞柄の綿織物が使われていました。

石田縞は江戸時代の終りころ、鯖江市の石田地区で織り始められた縞木綿で、着物や布団の生地として越前各地に売りだされました。大正期には、県内の小、中、女学校の制服にひろく採用され、石田縞の黄金時代でした。しかし、人絹織物の出現や服装の洋装化のため、昭和10年ころに絶えてしまいました。当時の制服も、もうほとんど残ってはいません。

被服学を専攻する一人の女子学生は、この石田縞に興味をもち、復元にとりくみました。ビデオでは、彼女が、卒業生からの聞き取り調査や、使用された染料や縞を構成する糸の割合の研究を重ね、手織り機で織り上げ、福井師範学校女子部の袴を復元するまでを紹介しています。

こうしてよみがえった70年も昔の袴を感慨深げにながめるおばあさんの顔が印象的です。石田縞の袴にきりりと身を包み、新しい時代の女子教育を受けていた青春時代が懐かしく思い出されたことでしょう。（田中）

あなたも はくぶつかん仲間！

福井県立博物館 友の会 会員募集

★こんな特典があります★

- ○博物館と友の会の行事をもれなくご案内します
- ○春秋の特別展を無料で観覧できます（家族会員は2名まで）
- ○夏の共催展「人類誕生400万年」を会員特別割引で観覧できます
- ○常設展示を何度でも観覧できます（家族会員は1度に4名まで）
- ○県外の新しい博物館や周辺の史跡をまわる見学会に参加できます
- ○友の会の会誌「Myミュージアム」をお届けします
- ○博物館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします

◉今年度から、化石や恐竜、古代の遺跡や遺物などについて学習する自主サークルをはじめます。

★期　間★

平成元年4月1日～平成2年3月31日

★会　費★

一　　般	2,500円
大学生・高校生	2,000円
中学生・小学生	1,000円
家　　族	5,000円

★お申し込み★

入会申込書（博物館受付にもあります）に会費をそえ、下のいずれかでお申し込み下さい

①直接、博物館内友の会事務局へ

②お近くの郵便局から郵便振替で ☞ □座番号**金沢5-23379 福井県立博物館友の会**

※申込書は、別に　福井市大宮2丁目19-15 福井県立博物館までお送り下さい。

※昭和63年度からの継続会員の方は、申込書は不要です。

③現金書留で郵送（申込書を同封）

◉　入会手続きをいただいた方には、会員証をお渡しします。

ふくいミュージアム
No15
1989. 3. 25発行

編集 発行　福井県立博物館
福井市大宮2丁目9－15
〒910
☎ 0776－22－4675(代)
印刷　出口印刷株式会社